

平成16年度「草地の動態に関する研究」現地検討会報告

8月23日～24日、上記会議が長野県霧ヶ峰高原において開催された。「草地動態研究」は、草地植生の長期的変動の解明を目的に、牧草地、野草地などを対象地として始められた研究で、現在は北海道から九州までのススキ草地(草原)を主対象に、草地に加ええられる管理の違いと植生・生産力などの長期的変化を生態的に明らかにしようとしている。

現地検討会は2年ごとに、各地の調査地を視察・論議するために行われており、今年度は山地畜産研



究部・山地草地研究室が関わっている霧ヶ峰のススキ草原で実施された。北海道から九州までの農研センターと畜草研の担当研究室から計13名の参加があったが、あいにくの霧と雨の中での検討会となった。

霧ヶ峰自然保護センターでは、観光地・霧ヶ峰の現状と問題点を聞くこともできた。草原の森林化、観光客の踏み込みによる裸地化、外来種等の侵入などにより草原の退化が起こっており、ススキ草原や湿原をどう維持していくかという課題の中で、「保全と利用のゾーニング」が構想され、行政・土地所有者・事業者が一緒になって取り組む必要があること、しかし具体的実施はなかなか難しいことなどを聞いた。

24日の室内での検討会では、霧ヶ峰での調査についての意見・希望、各研究室での取り組みについての検討、論文発表の重要性、データベース化による情報公開などが話し合われた。また、長期的には土地利用型畜産のためだけでなく、景観の保全や多面的機能・自然生態系の保全も視野に入れて研究を進める必要があることなどが論議された。

(山地畜産研究部 山地草地研究室長 斎藤吉満)